

## 第19回 | 地区仮設住宅訪問 12月27日(火)

訪問者:松下、森、福祉総合学部学生2名(記録:LLPまち・コミ友田)



年末も押し詰まった開催日で、仮設住宅の住人も親戚の家などに移っているかもしれず、参加人数は期待できないと考えていた。5分遅れで集会所に入ってみると、そこにはすでに9名の方々が我々の到着を待ち構えていた。常連の7名に前回初参加の高齢女性1名と今回が初参加の男性1名である。会議机が並ぶ殺風景な集会所の部屋の様子が変わっていた。コーナーにテレビがあり、その前に応接机とソファーが置いてありシクラメンの鉢植えまでが飾られていた。そこに参加者はくつろいでいた。生活支援アドバイザーが常駐する空間は安心して暖かさが加わったようであった。

今回は正月飾りを作る。金色の厚紙を扇型に切り、縁飾りをつけ松竹梅をあしらう。真ん中に漢字一文字を最後に書くというものである。活動が始まると、前回茶話会からの参加の高齢女性も高齢のための不自由さはあるものの自力での制作に没頭している。初参加の男性は絵に心得がある様子で独自に作画を試みている。それぞれが同じ材料であるが、その中でも配置、色彩を工夫してよりよいものに仕上げようとしている。

そうして出来上がったものに漢字一文字を加えてもらう。「来年への抱負でも、好きな漢字でも自由です」と森が言った。森と松下はこの被災地に4月の避難所の頃から関わってきたが、被災者に改めて言葉を求めることはしてこなかった。被災していない者が被災者の心に安易に踏み込んでほしくないと感じていた。しかし、今回は正月飾りの中に文字を入れてもらうことで、あえて言葉にしてもらうことにした。文字を書く段になると皆考え込んだ。家族や家を亡くした人にやはり残酷な注文であったのか。時間はかかったものの全員が完成させた。それをホワイトボードに貼り出して発表会を行う。

今回、地元テレビ局が取材に来ていた。おそらく師走の仮設住宅の取材に来たのであろう。この仮設住宅に取材に来たのは今回が初めてということだった。それを聞き、関心の薄さにややがっかりした。いずれにしても、テレビの前での発表である。公の場だ。「絆」「辰」「夢」「山」そ

れぞれがなぜその文字を選んだのかを述べた。「辰はお父さんが辰歳だから。もういないけど」「今年は何にもかも無になったけど、来年は夢を持っていく」どの言葉もたいへん重く響いた。参加者はお互いの出来栄を褒め合い、ことばに聞き入り、大きな拍手を送りあった。思いを文字に託して書き、それを人前で発表することを松下は是とした。自らの思いを表明すること、そして互いにそれに立ち会うことで心の区切りとなり、決意の強化になったと松下は言う。実際に皆の表情からも苦痛ではなく、前向きな出来事であったことが見て取れた。

今回は介護福祉コースの2年生の男子学生2名が同行した。一人は前回、手話レクチャーをしてくれたU君である。参加者は前回学んだ「おはよう」を独自にアレンジして使っていると笑って話した。今回は「あけましておめでとう。今年もよろしくお願ひします」をU君の指導のもと皆で覚えた。

会の終了後、テレビの取材者にボランティアの目的を問われた。「もの作りを通して被災者のコミュニケーションを円滑にするための場作りを行っている」という当初の大義名分がすでに当てはまらないことに気づいた。そう答えようとするやと違和感があるのだ。この場にあつて私達も学生も場の一員である。被災者とボランティアのどちらかが場を与える側でも与えられる側でもない。しかし、あえて言うなら見届ける役なのかもしれない。これから1年半のタイムリミットに向けてカウントダウンが始まる。仮設住宅退去の期限が迫ってくるのだ。被災しなかった者が被災者のくらしに関心を向け続け、なにかを感じ続けること、第三者の目が見続ける、被災者は見られ続けることになる。このことにどのような意味があるのかはまだわからない。学生が取材のインタビューに「継続することが大切だと思う」と答えた。見届けてみて初めてなぜ大切なのか分かるのではないだろうか。

参加者の一人でいつも活動的なNさんが素敵なマフラーをしていた。それを褒めると、簡単に手作りできるという。松下が「これをいわき(福島県)で教えますか」と問うと、Nさんの目が輝いた。「やりたい」と答えた。被災者が別の被災地にボランティアに行くという発想と、それに答えたNさんの表情の変化に驚いた。役割を持つことで自己が他者に認知されることをこんなにも人は求めるものなのだ。被災者であろうとなかろうと胸がドキドキするような行動が人のいきがいのなる。人間のからだを脈打つことを再確認することができるような機会を設けることが次なる支援に必要な要素になっていくのだと感じた。